

小寺菊子の小説にみる結婚と少女の自立

西田谷洋

小寺菊子は女性を抑圧する家を否定的に描く小説を多く発表している。ただし、後に菊子も結婚するように家は全否定されるわけではなく、特定のあり方が否定／肯定されるとみることができ、女性を家庭へと回収していく結婚をめぐる物語群では、結婚制度への無自覚な回収と抵抗、主体的な参画による自立の可能性と限界が示されており、女性を抑圧する家・家族との葛藤・闘争を少女を主人公に描く物語群では父や家への嫌悪とうらはらな甘えや家・家族からの脱出の挫折を通して自立した少女の成長を語る。

- 一 はじめに
- 二 結婚と身体
- 三 家族をめぐる少女表象

一 はじめに

小寺（尾島）菊子（一八七九～一九五六）は田村俊子、水野仙子と並び称される大正期を代表する女性作家である。

小林裕子氏は、菊子の作風を、①自伝的題材を外面描写によって人間社会の悲惨・醜悪面を再現したもの、②一人称もしくは書簡体小説で家族制度・規範を批判し女性性・自己・才能等の解放を訴えたもの、③社会的秩序や道徳との妥協を図り自己の可能性の伸展を図るもの、④女性の同性批判、の四類型に整理した上で、『青鞥』的な女性解放理念に覚醒させられつつも、「新しい女」にはなりきれず、「当代の職業女性の迷いと揺らぎを形象化していること」と、「表現方法に於いて極めて意識的であること」の二つの特徴を指摘し、「女性への社会と家族からの抑圧に憤りながらも、